

## 茜色の歌姫



## 第四部 白村江の戦い



白村江の戦い想像図

春正月の丙申の朔庚申に、御船、還りて那大津に至る。(中略)五月の乙未の朔癸卯に、天皇、朝倉橘広庭宮に遷りて居ます。是の時に、朝倉社の木を断り除ひて、此の宮を作る故に、神怒りて殿を壊つ。亦、宮の中に鬼火見れぬ。是に由りて、大舍人及び諸の近

侍、病みて死れる者衆し。(中略) 秋七月の甲午の朔丁巳に、天皇、朝倉宮に崩りましぬ。  
〔日本書紀〕卷第二十六

齊明天皇代 額田王の歌

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

〔万葉集〕一卷

大唐の軍將、戦船一百七十艘を率て、白村江に陣烈れり。戊申に、日本の船師の初づ至る者と、大唐の船師と合ひ戦ふ。(中略) 須臾之際に、官軍敗績ねぬ。水に赴きて溺れ死ぬ者衆し。

〔日本書紀〕卷二十七

#### 第四章 朝倉宮の鬼 661～663

宝大王自ら率いる二万の軍は、その年の一月十四日、伊予の熟田津に着き、その地でさらに兵を集め、二万五千にふくれあがった。

熟田津を発つたのが三月、瀬戸の海を渡って筑紫の那大津に入った。海を隔てて、北に向かえば壹岐、対馬を経て、三韓に至る。

それから半年、宝大王は筑紫を動かなかった。海岸の磐瀬の地を、いったんは仮の宮に定めたが、なぜか西南六十里(約30キロメートル)も奥に入った朝倉の地に遷り、宮を建て始めた。

広々とした平野に青田が広がり、川が枝分かれして豊かな流れを響かせる地に、宝大王は「橋の薫る広い庭を作れ」と詔し、近在から集めた壮丁や兵が興事を始めた。

もつと海に近い地に宮を建てられれば……。蘇我や巨勢らの大官どもは進言した。壹岐や対馬から、三韓の情勢が次々と伝えられてくる。海から遠ければ、事態に素早く対応することができない。

だが、大王は頑として進言を受け付けず、宮が建てられる間、讃良皇女や木幡らを伴い、川に船を浮かべて、あるいは山に登って木の実を摘んで遊んだ。

やがて、そのなかに十市皇女の姿が混じるようになった。滅多に笑わず、滅多に口をきかないが、それでも、讃良や木幡とともにいれば、心が安らぐようであった。時に野に出て、三人で鞠

を蹴った。鞠を蹴るときだけ、十市皇女の口元がほころび、笑みが浮かんだ。その様を、宝大王は眼を細めて見守った。

なんと悠長な……。大官どもは苦々しげであったが、豊璋王子はとくに焦りもみせず、時には、皇女たちの蹴鞠に自ら混じった。

蹴鞠にも巧みな豊璋王子に、讚良や木幡は歓声をあげたが、十市皇女のみは、やや後ずさりし、眼を向けようとしなかった。王子はそれに気づいてか、気づかずしてか、笑みを絶やさず、時には戯れ言も交え、皇女たちと遊んだ。

やがて春が終わり、夏になって朝倉宮が完成した。皇女たちの遊び場は、鮮やかに黄色の実のなる橘の木で飾られた宮中の広庭に移った。

「いまだ、大王の御意は決せぬのか？」

海に近い磐瀬飯宮に留まった葛城皇子は、ますます血色悪く、唇は白く、目尻や掌に皺が目立った。飯宮の高楼から、七百の船団が所在なざげに海に浮かんでいた。

並んで坐す鏡郎女は、冷たく皇子を見やりつつ言った。

「唐より還った坂合部石布によれば、唐の皇帝は、大王と談合するため、使を送ってもよいと言ったとのこと」

その年の春、唐の都に留められていた大王の使節、坂合部らが放たれた。海上で風雨に悩まされ、一月、苦しみ漂いながら、この五月、筑紫に辿り着いた。

「即ち、宝大王の意はやはり、軍なしに唐に兵を退かせることにあつた。唐の皇帝も、大王の

申し出を諾した。このままでは、軍は興るまい」

葛城皇子は黙したままであつた。鏡郎女は続けた。

「そればかりではない。飛鳥の留守司を務める大海人皇子、その差配ぶりは民を感嘆せしめ、次の大王にと望む声も高まりつつありと聞いた。あるいは宝大王も、次の大王位は大海人へと……」

「言うな」

葛城皇子は弱々しく遮った。鏡郎女はあざけた。

「かつて汝は、かの箸墓にて、吾を姦しつつ語つたの。四海にあまねく、日輪の御稜威を……。その大業を、容易く諦める皇子であつたか」

「やめよ……」

「やめぬ」

郎女は、皇子の襟を掴んで迫った。

「かように気弱な皇子と知っていれば、たとえ一度なりとも、まぐわうのではなかつた！」

葛城皇子は、猛然と鏡郎女の胸ぐらを掴んだ。押し倒し、力を込め、衣を左右に引き裂いた。あらわになつた胸乳に貌を押しつけ、荒々しく、裳裾に手を入れた。

鏡郎女は抗わなかつた。皇子の首を優しげに抱き、耳たぶに唇を寄せた。

七月になつた。

飛鳥に留まつた大海人皇子は、三日に一度、岡本宮に赴く。壮麗な岡本宮も、宝大王も女孀どももことごとく筑紫に遷り、政庁に詰める史らと僅かな兵ばかり、歩く人もまばらで寂しげな

風情であつた。

史とは、文字を扱う官人を言う。かつては、大王家や大和に起こつた事どもを記して蔵する役であつたが、税や壮丁の出入り、大王の詔を文字にして諸国に伝える等、様々な雑務を担つていた。

大海人皇子は、史どもの報告を聞き、しかるべく裁可する。それが終わつて河辺宮に戻れば、諸国から来たつた小豪族どもが待ちかまえている。大がかりに兵を徴したため農事が捗らず、食糧や兵器も提供させられ、疲弊した邑が多い。皇子は、彼等の嘆願に応え、税を減らす等の措置をとつた。

いつしか、河辺宮の門は、嘆願の小豪族どもで溢れた。諸国には官衙が置かれていたが、詰めていた土蜘蛛どもの多くが、鏡郎女に随つて筑紫に遷つたため、統制が緩んだ。官衙の官人どもが、小豪族や民から不当に税を搾つて私する事も多くなつた。大海人皇子は、人を派して調べさせ、悪辣な官人は厳しく罰した。

大王が筑紫に遷つてより、大和の政事は寛やかになつた。人々はそう囁き合い、ますます、河辺宮の門を叩く者は増えた。

八月に入つたばかりのある夜、筑紫よりの使者が、密やかに河辺宮を訪れた。使者は、葛城皇子の書を持参していた。書を開いた大海人皇子の貌色が変わつた。皇子は使者を退らせ、腹心の舎人を集めた。

「宝大王が崩御したもうた」

皇子の室に集まつた置始比等、村国男依、朴本大國ら舎人は、呆然と貌を強張らせた。

「大王が……」

「然り」

大海人皇子は、もたらされたばかりの書を、彼等に示した。

「七月二十四日、朝倉宮にて、と」

「何故に」

村国男依が膝を進めて問うた。

「病にでも罹りたもうたか」

「何も記されてはおらぬ」

皇子は首を振つた。

「ただ、こうある。朝倉宮を造りし折り、朝倉社の木を切つた。民どもは、社の神の怒りを恐れたが、大王は聞き入れなかつた。故にか、しきりに宮の裡に鬼火が見られ、多くの舎人や官人が病んだ。大王が崩御したもうた日、朝倉山に鬼ありて、大笠を着て、宮を望み見た……」

舎人どもは互いの貌を見合わせた。大王の死は、国津神の祟りということか？

「皇子よ」

朴本大國が問うた。

「朝倉宮に現れた鬼を、何と見られるぞ」

「使者の口上では……」

皇子は応えず、言つた。

「葛城皇子は、しばし朝倉宮に留まり、政事を称制する。次なる命あるまで、この事を秘し、滅多に動くな、とのことだ」

確かに……。宝大王が亡き後、朝倉宮に集う二万五千の兵や大官どもを纏めるとすれば、亡き大王の御子たる葛城皇子より他にはいない。

称制とは、唐の言葉で、皇帝が幼いとき、代わって臣下が政事を執ることを言う。すなわち、葛城皇子は大王位には即かぬとの意であった。宝大王は、誰が大王位を継ぐか明らかにしないまま、飛鳥を發った。葛城皇子が大王位には即かぬということは、少なくとも宝大王は、葛城皇子に御位を継がせるという遺詔を發しなかったのだ。

では、後継の大王をどう決めるか。群議によるしかない。しかし、三韓の危機を前に、葛城皇子も大官どもも、筑紫を動けない。とすれば、皇子が仮に政事を称制し、三韓の件が終わつての地、改めて群議を開いて決めるのは、理に適つていよう。

「されど……」

置始比等が、白いものの混じった髭を撫でつつ呟いた。

「大王は、まことに遺詔を出したまわぬまま、崩御したまもつたのか」

舍人どもは息を呑んだ。もし、大王の遺志が、大海人皇子を大王に即けるということであつたとすれば……。

あり得ない話ではない。宝大王が、血のつながつた葛城皇子よりも、大海人皇子をこそ好んでいることは、飛鳥じゅうの誰もが知つていた。

「大国よ」

大海人皇子は、静かに口を開いた。

「さきほどの汝の問い、すなわち、朝倉宮の鬼の正体が詳かならざる間は、何を議しても詮ないこと」

今は、次の命を待とう、この事、誰にも漏らすな、と皇子は念を押しした。

それから三日、筑紫よりの報せは途絶えた。大海人皇子は、常と同じく、留守司として政務を執り、飛鳥の裡に目立った変化は現れなかった。

果たして宝大王亡き後、葛城皇子は如何するのか。大王の喪が明けぬ間に、兵を動かすとは考えにくい。すでに大王の陵は、飛鳥の西なる小市の地に造られてある。大王の亡骸を葬り、さらに殯を行う。大王が男の場合、后が陵の傍らに殯宮を建て、亡骸を治めた棺とともに籠もり、御魂を鎮める。常ならば半年、長ければ一年に及ぶ。大王が女の場合には、殯を務めるのは、葛城皇子か大海人皇子ということになるう。

それよりも、二万五千の兵と、七百の船団をいつまでも筑紫に留めておくわけにもゆくまい。果たして、宝大王の意はいづくにあつたのか。軍を興そうとしていたのか。それとも、水軍を三韓近くを集めることよつて、新羅やその後ろ盾である唐と談合し、軍を退かせるつもりだったのか。そして、その意とするところを、葛城皇子に伝えてあつたのか。

何も分からぬまま、三日目の夜。

伊勢から、かつて舍人として仕えていた海部石床が、河辺宮に出向いてきた。今は海部の長として、伊勢を宰領している。

「皇子よ」

大海人皇子の室に入った石床は、密かに耳打ちした。

「讃良皇女が、伊勢に」

「讃良が？」

驚いた皇子は、重ねて問うた。

「何故に、筑紫にいるはずの讃良が伊勢に……」

「詳しくは、伊勢の地にて。吾が邸に留めたてまつつてあり」

伊勢に赴くのは十数年ぶりか。

五十鈴川を下りながら大海人皇子は思った。

伊勢の地には、母なる稗田阿礼がいる。今でも崖上の洞に、独りで棲んでいるはず。

土蜘蛛の眼を恐れ、かつて蘇我鞍作が死した直後に訊ねてより、伊勢の地には足を踏み入れていない。しかし、土蜘蛛の多くが筑紫に遷り、監視の眼が緩んだ今が好機ではあった。

大海人皇子は、海部の有する小舟に、壮丁の装いで乗り込んだ。

石床が言うには、讃良が伊勢に着いたのは、二日前、ちょうど、葛城皇子の使者が大王の崩御を伝えた翌日であった。夜中、海部の邸の門を叩く者がいた。明けると、粗末な貫頭衣を纏い、髪も貌も旅塵に汚れた女が二人、立っていた。讃良皇女に付き添っていた女は、額田郎女の手の者と告げ、皇女を匿い、大海人皇子に報せよ、と言って去った。

讃良は怯え、何を問うても応えなかった。石床は、皇女を邸内に留め、急ぎ、飛鳥に向かった

のであった。

海部の邸に着いた大海人皇子は、奥まった倉に通された。中に蔵してあった物は取り出され、きれいに掃き清められ、褥など調度がつらえてあった。

そこに、讃良はいた。

大海人皇子の姿を見るなり、強張った貌がみるみる崩れ、皇子の懐に抱きつき、嗚咽した。石床は、灯火を点じ、倉の扉を閉めて、外へ出た。

やがて涙を止めた讃良は、身を起こし、皇子と向かい合った。

「何故、伊勢へ？」

皇子は問うた。讃良は応えず、言った。

「大王が弑されたもうた」

「何？」

弑された……即ち、殺された。

皇子は腰を浮かし、重ねて問うた。

「誰に？」

「葛城皇子に」

声も出なかった。葛城皇子が実の母なる大王に手をかけた。何故？ どのように？ 皇子独り？ 蘇我や巨勢、中臣はそれを知るや？ あるいは彼等も皇子と謀を共にしたのか？ そして、鏡郎女は？

讃良皇女はしばし口を噤み、やがて語り始めた。

…唐から還ってきた坂合部石布の報せを聞いた大王は、朝倉宮の奥深く、寢屋の隣室を書庫とし、様々な唐の書運び込ませ、讚良を呼んだ。

数日、大王は坂合部石布に、唐の皇帝やその臣らの様を詳しく質し、讚良にも聞かせた。やがて坂合部石布は呼ばれなくなり、讚良と二人、唐の書を前に、様々な事どもを調べた。讚良にも、大王の意が、唐の誇りを傷つけることなく、百濟より軍を退かせるための策を練っていることは、明らかに見てとれた。

十日ばかり書庫に通ううちに、大王の身边を警護する兵や女孺どもも、讚良の出入りを意に介さなくなった。

ある日、前夜、大王に問われた事どもを調べるため、讚良は朝から書庫に籠もった。干し飯と水を持ち込み、日が傾くまで書に向かい、いつしか、文机に頬を乗せて眠りに落ちた。

眼を覚めたとき、すでに書庫は闇に覆われていた。明けた窓から、月明かりが差し込んでいる。ひとつ伸びをして立ち上がるうととき、隣の室から声が響いた。

「大王よ」

葛城皇子の声…。讚良は四肢を強張らせた。大王の居室との間を隔てる壁に、隙間があり、光が漏れていた。そっと覗くと、椅子に坐す宝大王の御前に、葛城皇子が膝を突いていた。大王の傍らには、鏡郎女が眼を臥せて待っている。

「蘇我や巨勢ら豪族ども、頻りに出兵を言い募り、抑えることもあたわず。また、磐瀬に留まる兵どもの軍規は乱れ、民が家に押し入り、逃散する者も後を絶たず。さらに、二万五千余の兵の

糧秣の負担にて、諸国は疲弊し、国の蔵も傾きつつあり」

宝大王は眼を閉じ、黙したままであった。葛城皇子は、声を励まして断じた。

「さらに出兵を延ばせば、不測の災い生じることもあらんか。大王にはせめて、この後の策を詔したもうべきである」

皇子は口を噤み、大王は眼を開けた。

「汝は、それを陳べに、磐瀬より朝倉まで来たれるや」

「然り」

「皇子よ、軍規を正すは汝が務め。また、蘇我や巨勢は、筑紫のそこかしこで交易に励み、巨きな利を得ていると聞く。また、今年はもの生りもよく糧秣の不安は毫もなきこと、飛鳥の留守司より報せあり」

冷たい口振りに、葛城皇子は俯き、拳を握りしめた。大王は続けた。

「詔は、やがて出すであらう」

「如何なる詔なりや」

「今は言えぬ」

「何故に」

「何故に汝に明かさねばならぬ」

「母よ」

鏡郎女は、皇子を一瞥し、鼻白んだ。皇子の臉から、涙が一筋、頬を伝っていた。

「何故に、母なる大王よ、真の意を吾に明かしたまわぬ」

「そのこと」

宝大王は、一瞬、憎悪の籠もった眼差しとなり、すぐに冷たく眼を細めて顎を上げ、言い放った。

「汝が心にこそ、問え」

「では、やはり……」

皇子は、唇を歪め、嘔れた声を吐き出した。

「母なる大王よ、実の子たる吾よりも、かの鞍作を……」

次の瞬間、何が起こったのか、隙間から覗いていた讚良皇女には分からなかった。屈んでいた葛城皇子の背が伸び、大王に覆い被さった。大王は仰向けに倒れかけ、しかし再び身を起こし、眦をつり上げ、唇を引き結び、強張った貌が震えていた。葛城皇子が悲鳴をあげ、顎を天井に向けて悶え苦しんだ。

大王の腹部に皇子の短刀が刺さっているのが分かったのは、赤い血が白い喪裾を濡らしているの眼にしたからであった。大王は刺されつつも、気丈に手を伸ばし、皇子の股間を掴んでいた。

「鞍作よ、今ぞ、汝が仇を討つぞ！」

喘ぎつつ、大王は声を絞り出した。

「かつて、板蓋宮にて汝が受けた苦しみ、この腐れ皇子に与えようぞ！」

白眼を剥き、大きく身をのけぞらせ、痙攣する葛城皇子に、大王は唾を吐きかけた。

「死ね、呪われし子よ！」

葛城皇子が絶望的な呻きを迸らせたとき、不意に、大王が皇子から離れた。同時に、皇子は

両手で股間を押さえ、床に頽れた。

鏡郎女が、背後から右腕を大王の喉に回し、厳しく締め付けていた。大王はやっと背後に貌を回し、鏡郎女と向き合った。

「汝は……」

驚き呻く大王に、鏡郎女は面差しを変えることなく、告げた。

「吾は新羅の王女、麗姫」

言うなり、大王の頸骨は砕けた。

意識を失い、床に這って痙攣する葛城皇子と、腹に短剣が刺さったまま、仰向けに倒れた宝大王を見下ろしつつ、鏡郎女は冷ややかな眼差しで、乱れた髪を整えた。

布を畳み、剣が刺さった腹部にあてがい、引き抜く。鮮血のほとばしりを避けるためであろう。さらに、室の奥から、縫い物の針と糸を取り出し、傷口を縫合した。用意してあったらしい衣に着替えさせ、床に滴る血も拭き清めた。

葛城皇子が眼を開けたとき、大王は、眠るように椅子に坐していた。刺された腹や砕かれた首の傷も、跡を留めぬよう、装われていた。

「皇子よ」

鏡郎女は、血で汚れた衣や布を麻の袋に詰め、血を拭った短剣を皇子に差し出しつつ、問うた。

「歩けるか」

皇子は半身を起こし、首を振った。



「歩け」

「歩けぬ」

虚脱し、男童のように拒否する皇子を、鏡郎女は叱責した。

「歩いて、宮門に詰める舎人に命じ、蘇我や中臣、紀、巨勢をここに召せ。伴は随れず、密かに来るように、と」

皇子は立ち上がり、腰を突き出し、足を引きずるように室を出た。

独り残った鏡郎女は、しばし椅子に横たわる宝大王を見つめ、それから、さらに室の裡を見回した。

隣の書庫では、讃良皇女が震えていた。壁の隙間に貌を押しつけ、両手で己が身を堅く抱きしめ、食いしばった歯の根から血が滲むほど、こみあげる恐ろしさを押さえつけていた。

鏡郎女が、こちらに向かつて歩き出した時は、叫びそうになった。それでも耐えた。

母のように慕っていた大王が、眼の前で殺された事への悲しみや怒りではなかった。ただ、ひたすら恐ろしかった。

やがて、よろぼうように葛城皇子が戻ってきたとき、かえって恐怖が和らいだ。

鏡郎女が、皇子に問うた。

「舎人は発ったか」

皇子は頷き、大王の遺骸に背を向け、床に座り込んでうなだれた。肩が荒く上下していた。痛みのみでせいだけではないらしい。

「臆するな」

鏡郎女は、葛城皇子に並んで座り、肩を抱いた。

「大王は弑されたのではない……。病にて崩御したもうた……。おそらく、朝倉社の国津神の祟りによって」

「否」

皇子は首を振った。

「吾が……殺した」

頭を抱えた皇子のその手に、郎女は驚いた。

皇子の手は、赤く濡れていた。

「手も洗わぬまま、舎人に命じたのか？」

皇子は応えず、俯くままであった。鏡郎女は歯噛みした。やがて立ち上がり、「ここを動かず、誰も入れぬよう」と言い捨て、室を出た。

皇子は凝然と坐したままであった。ふと、逃げるなら今、と讃良は思った。鏡郎女は去った。

皇子の様子では、書庫を抜け出す音が響いても、気づかぬかもしれぬ……。

意を決して立ち上がったとき、再び隣の戸が開いた。

鏡郎女が戻ってきた。

「舎人の口は封じた」

皇子を見下ろしつつ、冷ややかに言った。

「気を整えよ。無用に人を殺めたくはない」

皇子は貌を上げ、何か言おうとした。鏡郎女は膝を突き、皇子の唇を、己が唇で塞いだ。皇子

は、双の手を伸ばし、郎女にしがみつき、そのまま暫く動かなかつた。三十路半ばの皇子は、男童のように、声を潜めて慟哭していた。

今だ。讃良皇女は足音を忍ばせ、扉に手をかけた。静かに開けたつもりだったが、隣室で、鏡郎女が立ち上がる気配がした。

「誰ぞ」

讃良は、暗い廊下を走った。幾つかの戸を押し開け、裸足で庭に降り立ち、足裏に食い込む玉砂利を鳴らし、ひたすら走った。

「讃良……？」

朝倉宮の大極殿の裏手に、額田郎女は家を一つ、与えられていた。密やかに叩かれた戸を開けると、讃良が激しく肩を上下させ、貌じゆう汗だらけで立っていた。

常ならば、眼を合わすことすら嫌う讃良の訪ないに驚きつつ、寢屋に招じ入れ、水を与えた。

「やがて、鏡郎女が来る」

水を飲み干した讃良は、息を切らしたまま、喘ぐように言った。

「鏡郎女が？」

「わけは、後で言う。鏡郎女には会いたくない」

ただならぬ気配を感じ、讃良を裏手の納屋に讃良を隠し終えた時、また戸が叩かれた。

「誰ぞ」

外に向かつて問えば、

「鏡郎女」

と静かに応えた。戸を開けると、鏡郎女が、伴も随れず、独り立っている。

「讃良皇女を探している」

「皇女ならば、宮の裡の寢屋に」

「寢屋におわさぬ故に、探している」

「皇女に何か？」

問われて鏡郎女は口を噤んだ。しばし家の裡を見回した。瞳が常になく落ち着かない。やがて口を開いた。

「確かに、讃良皇女は、ここにはおわさぬのだな」

「おわさぬ」

頷く額田郎女を、鏡郎女は凝視した。瞬き一つせず、探るようでもあり、脳裡でこれから如何すべきか考えを巡らせているような眼差しであった。

やはり、何かあった……。

額田郎女は、鏡郎女から眼を逸らさず、ゆっくりと腰を下ろし、言った。

「讃良皇女が来れば、まず、汝に報せる」

口元に浮かぶ笑みに、鏡郎女は眼を伏せた。そのまま踵を返し、去った。

額田郎女は動かず、気配を探った。鏡郎女の密やかな足音が遠ざかるのを確かめ、納屋の戸を開けた。

「鏡郎女は去った」

讚良は、怯えた面差しのまま、坐った。向かい合って坐し、額田郎女は問うた。  
「如何した」

堅く唇を引き結んでいた讚良は、やがて、途切れがちに書庫の壁の隙間から見た一部始終を語り始めた。

額田郎女は呆然と、しばし言葉を失った。葛城皇子と鏡郎女が、宝大王を弑殺した……。

外で足音が響いた。窓を小さく開けて見れば、蘇我赤兄が、急ぎ足に大極殿に向かうのが、月明かりの中に窺えた。やがて、紀大人と巨勢比等が、肩を並べて続いた。中臣金も、太った軀を揺すって現れた。

主立った豪族が集められた。いずれも、三韓出兵を迫る者ども。亡き大王の遺骸の前に、どのような策を練るつもりか。おそらく、宝大王は病で急死、後は葛城皇子が采配し、磐瀬に留まる二万五千の兵を、三韓の地へと送り出す算段。

彼等の策謀に抗する手立てはあるか。あるとすれば……。

額田郎女は、讚良を見つめた。俯き、両の膝を掴んで離さず、必死に耐えていた。四歳の折り、讚良は、母を含め一族が次々と自害するのを、山田寺の庫裏で見た。いま、なついていた大王が弑殺されるのを、暗い書庫で見た。かつて味わった恐怖と重なり、狂乱したくなるであろう衝動を抑えつけている。

鏡郎女は、自らの手で大王を弑殺した場を見た讚良を、何としても生かしておきたくはなからう。土蜘蛛どもに命じ、草の根を分けても探し出そうとするだろう。

讚良を殺してはならない。讚良を生かしておくことが、彼等の策謀に抗する唯一の手立て。

さらに……。

鏡郎女が、新羅の王女であることを、その耳で聞いた唯一人が讚良。

この後も続くであろう戦いに、讚良の存在は、大きな武器となる。

否。さような思惑を越えて、吾は讚良の養いの母。

「讚良皇女よ」

額田郎女は言った。

「疾う、伊勢へ向けて発ちたまえ」

「伊勢に？」

讚良は驚いた。

「筑紫にては、吾も皇女を匿いきれまい。心きいた女孀を一人、随わせる」

「何故、伊勢？」

讚良は、助けを乞うように眼を見開いた。

「逃げるなら……飛鳥へ……」

「皇女は、大海人皇子の許へ、行きたいのであろう」

額田郎女は頷きつつ、言った。讚良は貌を伏せた。女童の頃から、ただ独り、慕い、恋うてきた大海人皇子。

それ故に、皇子の妃であった吾を避けてきたのであろう？

その思いを口にはせず、額田郎女は続けた。

「鏡郎女も、汝が、大海人皇子の許へ逃げるものと察しているはず」

であれば、飛鳥への道々は、配下の土蜘蛛を伏せるべく、今宵のうちにも手を打つであろう。「大海人皇子に会いたければ、まずは伊勢へ。伊勢を宰領するは海部石床。かつては大海人皇子の舎人にして、吾とも古い馴染み。まず、石床の許に隠れ、然る後、石床をして飛鳥の大海人皇子に報せよ」

後は、皇子と石床が、しかるべく手を打ってくれよう。

讃良は小さく頷いた。丸みを帯びた肩が、かすかに震えていた。

「吾が養いの母よ……」

そこまで声を搾り出し、こみあげる思いの多さに、言葉に詰まった。

何故、額田郎女の許に逃げ込んだのであろう。讃良は、額田郎女を嫌っていた。大海人皇子の妃であったが故に。しかし、額田郎女を頼った。郎女ならば、必ず救ってくれる。そう信じていた。信じていたことに気づかず、いつの間にか郎女の家の前に立っていたことが口惜しくもあり、信じていたとおりに救ってくれようとしていることが、嬉しくもあった。交錯する思いを言葉に出来ぬまま、讃良は押し黙っていた。

「十二年前、吾は皇女の母から、皇女を預かった」

額田郎女が口を開いた。

「皇女は、必ず守る」

「朝倉宮の鬼とは……」

語り終え、啜り泣く讃良を見やりつつ、大海人皇子は呟いた。

「鏡郎女と葛城皇子であったか」

その夜、二人は初めて袴を共にした。

讃良は、激しく皇子を求めた。独りでは眠れぬと、自ら皇子の寝屋に忍び、驚き声もない大海人皇子に縋りつき、離れようとしなかった。

「皇子よ」

求めつつも身を強張らせ、十六歳の讃良は、皇子の胸に貌を埋めつつ、問うた。

「……未だ、額田郎女を恋うるや？」

皇子は応えなかった。讃良も強いて応えを求めなかった。

葛城皇子の使者、中臣金が筑紫から飛鳥に入り、河辺宮を訪なつたのは、八月に入ってからであった。

「亡き大王は、葛城皇子が磐瀬の仮宮にて、喪の儀を行い奉りたもうた」

大海人皇子は、どこか権高な中臣金の声音に不快な思いを禁じ得なかった。十六年前、吉野宮で会った時に見せた軽忽さは、変わっていない。宝大王が崩御した今、筑紫にあつて二万五千の兵を有する葛城皇子こそが、大和を統べる者。その側近くに侍る者としての自負が、どこか、大海人皇子を見下すような声音となって現れていた。

「いざれ、亡き大王は、船で飛鳥へと運び奉る。しかしながら、葛城皇子は筑紫を離れたまうわけにもいかず、その折りは、大海人皇子がよろしく殯を執り行うように、とのことなり」

重々しく手渡された葛城皇子の書を、大海人皇子は拝礼して受け取った。

「さて」

中臣金は、膝を進め、声を潜めた。

「これは、他言したもうなかれ」

襟に溜まった汗が匂うばかりに貌を寄せた。

「讃良皇女が、行方知れずに」

「讃良が？」

金は大仰に頷き、続けた。

「密かに諸国に人を派して探しても、杳として知れず。あるいは……」

金はふと口を嚙み、探るような眼差しで問うた。

「いづくにおわすか、皇子には心当たりのなきや、と」

「知らぬ」

皇子は、氣遣わしげな面差しを作って問い返した。

「行方知れずとは、自らいづくかへ行ったのか、それとも何者かが皇女を害せんとしたため、逃げたのか……」

金は首を振り、さらに声を潜めた。

「このこと、重ねて他言したもうなかれ」

中臣金が去った後、大海人皇子は、置始比等と呼んだ。

「葛城皇子らは、讃良が吾の許に逃れ来たものと疑っている」

さもあらん、と言うように、比等は頷いた。

「海部へ使いし、葛城皇子や鏡郎女の手の者が伊勢に現れた氣配あらば、すぐに報せるよう伝えよ」

「讃良のことを、思い煩うことはない」

鏡郎女は苛立ち、喪の最中にあることを示す白い麻衣を纏う葛城皇子に詰め寄った。

「まずは、葛城皇子が大和の大王たる御稜威を民に示せ。さすれば、たとえ讃良の口からかの件が漏れることがあろうとも、民は皇子に随う」

葛城皇子は黙したままであった。

冬が訪れていた。宝大王の遺骸は船で飛鳥へと発った。遺骸が着き次第、殯が行われる。年内には喪も明ける。今より、軍を三韓に進める備えを調べれば、年明けにも船は出せる。

しかし、何故か葛城皇子は動こうとはしなかった。喪中と称し、ほとんど磐瀬宮に籠もり、動こうとはせず、人前に出ようともしない。朝議も開かれず、日々、官人どもが奉ってくる雑事は、鏡郎女が代わって決裁を下していた。

まるで稚い童のような……。葛城皇子は毎夜、鏡郎女を求めた。郎女の胸に貌を埋めてしがみつき、心に巢喰う恐れを忘れようとするかのようにであった。

事果てた後も、皇子は郎女に抱きついて離そうとしない。かくも、か弱き皇子であったか……。失望を覚えつつも、郎女は耐えた。葛城皇子が、再びかつての剛毅さを取り戻すまでは、耐えるしかない。

蘇我や巨勢らが、鏡郎女のもとに日参し、議は開かれぬのか、としきりに問う。すなわち、三

韓出兵はいつ公に決まるのか、探りを入れているのだ。

額田郎女は……。何も言つてこない。筑紫の地に留まる兵どものため、宴を開き、歌舞を披露している。十市皇女は、木幡とともに宮に籠もつた。睦みあつた讚良がいなくなったことを、どう思っているのか。二人が、額田郎女と何事か談じ合つた形跡はない。

宝大王は崩御し、三韓出兵の妨げは消え、しかし、事は動かない。葛城皇子が動かぬかぎり、鏡郎女は何もできない。何もできぬことに鏡郎女は苛立つていた。何のために、己が手を汚したのか。

何も起こらぬまま冬は過ぎ、年が明けた。

そして、事は動いた。

「七枝の劍、出でたり」

報せはまず、飛鳥にもたらされた。

「七枝の劍が……」

報せに、大海人皇子は愕然とした。劍の左右の端から、それぞれ三本の刃が枝のごとく生え、大和の大王家の祖たる日輪の女神が国を統べるべき者に与えたと伝えられる神劍。

葛城皇子がかつて執拗に追い求めていた王者の徴が、播磨の畑より出できたという。

大海人皇子は、舍人どもに命じた。

「すぐに、播磨へ行く」

葛城皇子に渡してはならない。なんとしても己が許へ……。

その頃。筑紫の磐瀬宮。

「七枝の劍か！」

葛城皇子の貌が、割れんばかりに綻んだ。

「疾う、これへ運べ」

「すでに」

鏡郎女は、心得貌で言った。

「中臣金を播磨へ派した」

「金ではなく……」

葛城皇子は喚いた。

「汝、自ら行け。大海人皇子は、すでにこの報せを知り、手を打っているはず。汝が行き、必ずこの地へ運べ」

播磨の官衛の門をくぐつた大海人皇子の貌が凍つた。

出迎えたのは、播磨を宰領する岸田臣麻呂。その隣に、笑みを浮かべた鏡郎女が立っていた。常になく、鏡郎女は深々と拝礼した。

「七枝の劍は、すでに筑紫へ運ばせた」

その勝ち誇つた眼差しに、大海人皇子は、こみ上げる憤りを抑えつつ、頷くしかなかった。

「皇子が出でましたもうと知っていれば、船を發させるを遅らせたものを」

大海人皇子は、岸田臣を見やった。岸田臣は、眼を伏せたまま黙して語らない。大海人皇子は悟った。不意の大王崩御に疑心を抱く民に、七枝の剣が出でたは葛城皇子の徳ゆえと、喧伝される。葛城皇子の御稜威は弥増し、その御稜威を背に、堂々と三韓出兵を宣するであろう。

させてなるものか。

岸田臣が開いた宴が果てて後、与えられた室の褥に入った皇子は、大王崩御が葛城皇子らの弑殺であることを知る讚良皇女を、如何に用いるべきか、思案を巡らせた。

その傍らに、不意に人影が立った。身を起こし、傍らの剣を引き寄せて見れば、鏡郎女であった。

「皇子よ」

鏡郎女は、静かに言った。

「葛城皇子は、七枝の剣の出でた瑞兆を寿ぎ、今年一年の税を諸国に免じたまう」

「税を免じると？」

「然り」

「筑紫に留まる二万五千の兵、彼らの兵器や糧秣は、如何する」

大海人皇子は問うた。

「もはや、大王家の蔵は、底を尽きつつあるぞ」

「蘇我や巨勢らに出させる」

鏡郎女は穏やかな声音を崩さなかった。

「彼等は既に、筑紫に來たりてより、交易で巨きな利を得ている。さらに百済の鉄を手に入れる

ためならば、決して厭うまい」

「百済の鉄？」

ならば、やはり……。

「皇子よ」

鏡郎女は右の膝を突いた。

「察するとおり、筑紫の兵は三韓へ征く。多くの兵がかの地で死ぬ。三韓の民もまた……」

「ならば」

大海人皇子は、鏡郎女の襟を掴んだ。

「何故に汝は、それを知りつつ……」

「皇子よ」

鏡郎女が微笑んだ。彼女の手が動いた。その左手に、大海人皇子が掴んでいたはずの剣が、その右手は、皇子の股間に伸びていた。

「今ここで、皇子の命を絶つことも、容易いのだぞ」

鏡郎女の右手は、皇子のふぐりを二つながら、握っていた。

「今、飛鳥に留まり、何もせずにいれば……」

総身を強張らせた皇子の眼に映る、鏡郎女の面差しから、不適な笑みが消えた。

「大和に三韓に唐。すなわち、天下の全てを、いずれ汝が継ぐことも可となろう」

天下の全て……。

大海人皇子は、呆然と鏡郎女を見詰めた。その眼には、脅しや嘲りではなく、いとおしげな

光が湛えられていた。

「吾等が大地に流した血の上に、汝等が望む国を築け」

鏡郎女は立ち上がった。手にした剣を皇子の膝元に置き、踵を返した。

「一つ、問う」

大海人皇子の声に、鏡郎女は足を止めた。

「新羅の王女が、何故、三韓出兵を推し進めようとするぞ」

問うて悔いた。讃良を匿っていることを明かしたのも同じであった。

鏡郎女は、笑みを浮かべた面差しを、わずかに皇子に向け、言った。

「行方知れずになった讃良皇女、もし、飛鳥に現れれば、筑紫に還さずともよい、汝が許で慈しめ」

そのまま去った。

大海人皇子は、凝然と坐したままであった。もはや讃良の存在は、鏡郎女の妨げにはならない。七枝の剣の出現は、それほどまでに験のあるものなのか。

汝等が望む国を築け……。

千々に乱れる皇子の脳裡に、鏡郎女が放った言葉の意味を探る余裕はなかった。

「七枝の剣こそ、葛城皇子が王徳を表すもの」

播磨へ行くに船で海路を辿った大海人皇子は、帰りは陸路を選んだ。その道々、葛城皇子を褒め称える民の声を、幾度となく聞いた。

「さらに、皇子が百済の頼みを諾し、三韓に兵を進めれば種々の珍宝が大和へ入る。吾等が生業も、さらに富もうぞ」

野に、田に、市に、津に、人の集うところに、必ずその声は響いている。その声が、鏡郎女の息のかかった者どもによつて広められているのは、明らかであった。

「額田郎女よ」

大海人皇子は呻くように、心の裡で呟いた。

筑紫にあつて、額田郎女は何をしていた。鏡郎女の策を止めようとはしなかったのか。あるいは百済の王子に情が移ったか。汝もまた、三韓出兵を諾したのか。

「手立ては……もはやないのか」

磐瀬宮の庭は、群臣で埋め尽くされていた。

百済で、新羅や唐の軍と戦っていた将軍、鬼室福信が、捕虜とした唐兵数十を随れて、筑紫に至った。

長い戦に、頬は削げ、しかし眼差しは鋭く光る鬼室將軍が宮門をくぐつて現れるや、歓呼の声が木霊した。続いて、縄をうたれ、怯えた面差しの唐兵が、百済の將兵に囲まれて入ってくると、歓呼は、憎悪の喚きに変わった。

葛城皇子と豊璋王子が並んで、鬼室福信を出迎えた。

「雄雄しき將軍よ」

葛城皇子は叫んだ。



「大和は汝等に、十万隻の矢、五百斤の糸、一千端の布、一千張の革、そして稻種三千石を賜う」  
拝礼した將軍に、群臣は再び歓呼した。

葛城皇子の背後に、二人の童わらわによつて七枝の劔が高々と構えられていた。日の光を浴びる劔を背に、葛城皇子の偉容は、見違えるばかりであった。

幾人かは、葛城皇子が纏う衣服に首を傾げた。常とは違ふ、眼も鮮やかな黄色の地に、青く龍の紋様。

「黄色は、唐では皇帝しか纏まとえぬ色、龍の紋様も、皇帝より他には許されない」

ある人々は、常ならばこのような席には必ずいるはずの姿が、今日は見えぬことに気づいた。

額田郎女がいない……。

宝大王の御世であれば、儀式には歌舞かぶがつきものだった。しかし、郎女や舞女、歌女のかわり、中庭のそこここに、物々しい甲冑に身を固めた兵ばかりが目立つ。

そういえば……。

ある人々は囁きあつた。

宝大王の傍に、常に侍っていたあの女も見えぬ。

ああ……例の、土蜘蛛の……。

「扶余豊璋よ」

不意に葛城皇子が叫んだ。兵どもが一斉に左右の手を挙げ、「黙」「黙」と喚いた。人々は口を噤み、中庭は静まりかえつた。

静寂のなか、葛城皇子と並んで立っていた豊璋王子が、三歩、前に出て、そのまま踵かかとを返し、

膝を地に突いた。あたかも、葛城皇子に拝礼するかたちとなつた。

「扶余豊璋よ」

皇子はさらに、声を張り上げた。

「汝を、百済王くだらのみに封ず」

人々はざわめいた。他国の地の長おさを王として封ずる権を持つは、天下にただ一人、唐の皇帝のみである。

葛城皇子の背後より男童が進み出、橙だいだい色の冠を差し出した。大織冠。大王が臣下に賜う最高の官位を示す冠。人々はまたざわめいた。

受ければ、豊璋王子は、大和の、葛城皇子の臣として服属することになる。

鬼室福信をはじめ、百済の將軍たちの面差しが強張っていた。しかし、豊璋王子は、躊躇ためらうことなく、冠を拝受した。

銅鑼が鳴つた。兵どもが鉞を差し上げ、鬨とぎの声を上げた。

人々は、葛城皇子のまとう黄色の衣の意を悟つた。葛城皇子は、自らを、唐の皇帝、世界を統すべる者に擬した。唐の皇帝の権を行使し、百済を大和に服属し朝貢すべき国となした。

すなわち、唐に戦を宣したも同じであった。

人々は、心の裡なる怯えを隠すように、喉を搾つて歓呼の叫びを上げ続けた。

そのどよめきは、磐瀬宮からやや離れた、那大津なのおつにも届いた。七百の船団の浮かぶ海から押し寄せる波打ち際に近く、聳える高樓に、鏡郎女は独り坐していた。

……これでよかつたのか？

七枝の剣を手に入れた葛城皇子は、かつての傲岸さを取り戻した。取り戻すと同時に、鏡郎女と褥を共にすることが絶えた。郎女が知らぬ間に、三韓出兵の議は、すらすらと動き出した。

まず、葛城皇子から賜った兵器糧秣を携えた鬼室福信ら百済の將軍らを送り届ける。その間、高句麗に使者を派し、新羅に軍を攻め込ませる。新羅が高句麗に兵を差し向けた間に、豊璋王子を奉じた第一陣を百済に送る。そして、新羅や唐の動きに応じ、機を見て三万の軍を派する。

鏡郎女が、その手はずを聞かされたのは三日前。何故、己に知らせることなく、軍議を進めたのかと詰め寄ると、葛城皇子は傲然と応えた。

「軍の議は、吾と大將軍が決することである」

鏡郎女は、筑紫に四百の土蜘蛛を集めていた。二十年にわたって鍛え上げた精銳のほとんどを、自ら率いて三韓出兵に参加させ、諜報や、後方の攪乱に使うつもりであった。

土蜘蛛どもを百済の地に馴染ませるため、百済に還る鬼室福信に伴いたいと申し出た鏡郎女に、葛城皇子は、

「汝等土蜘蛛は、大和へとどまれ」

と拒否した。

「大和の裡も蔑ろにはできぬ。殊に、大海人皇子の動きから眼を離すな」

鏡郎女は抗い、やっと土蜘蛛の百済行きのみは諾させた。それでも、大和の本軍が出発するまでは筑紫に留められることとなった。

「百済の諸將は、女軍と共に征くを厭う」

船団で埋め尽くされた津の彼方に、壹岐の島影が見えた。さらに北には対馬、そして三韓の地。

この二十年、新羅を追われ、百済を追われ、大和にたどり着き、ここまで土蜘蛛どもを育み、様々な謀をなしてきたのは、すべて今日のためであった。自らの手で大王を扼殺してまで、ついに三韓出兵を実現させた。

だが、葛城皇子は、鏡郎女が出兵に参加することはおろか、軍議に加わることすら許さない。

気弱にすがってきたかと思うと、居丈高に排しようとする。

こうなることは、前より薄々気づいてはいた。今は、先を見通し、手を打つべき時期。しかし、何故か物憂く、気が奮い立たない。

一人の土蜘蛛が、高樓に上がり、鏡郎女の傍らに膝を突いた。

「紗手奈」

郎女より二、三歳下、冷静で篤実、もつとも信を措く土蜘蛛であった。

「どうやら、吾はこの地に留められる」

紗手名は眉を顰めた。

「三韓にての土蜘蛛の差配は、汝に委ねる」

「いつ発つことに？」

「未だ定まらぬ。気を撓めぬよう、皆に伝えよ」

紗手名は拝礼して去った。

鏡郎女は、再び眼を海に向けた。

磐瀬宮から、再び銅鑼が響いてきた。続いて、ひどく武張った楽の音。百済の軍樂であった。

鏡郎女は、柵に背をもたせかけ、昨夜のことを脳裡に蘇らせた。葛城皇子が、豊璋王子を百済

王に柵封し、大和に服属せしめようとし、王子が諾したことを耳にしたのが昨夜であった。  
鏡郎女は、密かに豊璋王子の邸を訪うた。

——麗姫か……。言いたいことは分かっている。

……。

——なぜ、私が百済王の柵封を受けたのか、と聞きたいのだろうか？

——ええ……。

——確かに屈辱だ。たとえ唐と新羅の連合軍を追い払い、領土を回復したとしても、百済は大和の属国となるしかないのだからな。

……。

——だが、大和の救援軍なしに、失地回復は果たせない。

——だから、屈辱的な要求を呑んだというの？

——一時的にね。

……。

——だいたい予想はついてた。あの男が、無償で兵を貸してくれることなどありえない。だからこそ、この二年、さまざまに手は打ってきた。おめおめと大和に隷属し、朝貢し続ける気はないさ。

——まずは、名より実を取ったというのね……。

——鬼室福信のもとに集った百済兵は一万。多くの百済の民も、われわれを影ながら支えてく

れている。さらに、阿部比羅夫が鍛え上げた水軍を核とする三万の大和軍があれば、唐を追い払い、新羅や高句麗を滅ぼし、百済が三韓を統一することも夢ではない。そうなれば、麗姫、どうなると思う？

——……大和と三韓。唐を除く世界は、葛城皇子のもの。

——そのとおり。私が三韓を統一しても、大和に朝貢すべき地が広がるばかり。だが、さらに続きがある。

……。

——あの男には、決定的に欠けているものがある。かつて君が教えてくれたとおり、彼は野心家で、こうと決めれば、情容赦なく突き進む力がある。だが、人望はない。いったん躓けば、脆いものさ。

……。

——あの男が掌中におさめた世界。それを、そっくり頂くのは、造作もないだろう。

——……あなたが、葛城皇子を倒し、唐を除く世界を、手に入れるというわけね。

——そのとおり。そして、唐と対決する。いずれは、世界のすべてを、私のものにする。

……。

——君がなぜ怒っているのか、分かるさ。葛城皇子から百済王に封ぜられることも、その後、どのように策を進めていくか、君に何も相談しなかった。すべて私が決めた。だがね、麗姫。

……。

——私が世界を手に入れたときにこそ、君に動いてほしい。君が言った、君のような苦しみを

誰も味わうことのない理想郷を作るために。

——そうなのね……。

——そうだ。

——私は、あなたが世界を手に入れるまで、待ってればいいってわけね。

——私だって待っていたんだ。葛城皇子や豪族どもに、君との関わりを悟られぬよう、距離を置いてきた。いましばらくは、気づかれたくない。

——……分かった、待つわ。

——分かってくれたね。

——ええ……。すべてあなたに任せるわ……、私の力が必要なときは、何時でも言っただけのこととする。

——頼りにしてる。……麗姫……。

——……やめて。

——……。

——言っただけでしょう。私を抱こうとするのはやめて。まるで、私を言いなりにさせるために、好きでもないのに抱こうとするみたいで……、かえってあなたを信じられなくなってしまいわ。

——……そんなつもりでは。

——女を抱きたければ、額田郎女のところに行きなさい……。

——……。

——嫌味で言ったわけじゃないのよ。誤解しないで。私はただ……、あなたとは、普通の男と

女の関係でいたくないから。

——……。

——もっと、志こころざしの高い間柄でいたいから。

——私も、そうありたいと思っている、麗姫。

——……。

昨夜、豊璋王子の宿を出て、夜道を走りながらつぶやいたことを、高樓の上で、磐瀬宮の歎呼と、七百の船団を浮かべた海の波音を聞きながら、鏡郎女は胸の裡で再び繰り返していた。

あなたたちの思い通りにはさせない。

あなたもしよせん、葛城皇子と同じよ。

新しい世界は、私が支配する。

私が……。

その年の五月、百済王となった豊璋を奉じた二百の大和の船団が百済に渡り、三韓を貫いて流れる大河・錦江の北岸に位置する周留城しゅうりゅうじょうに入った。百済の民は歎呼の声で新たな百済王の帰還を言祝ことほいだ。

その頃、新羅では武烈王ぶれつおうが崩御、父の後を継いだ文武王は、その喪と高句麗からの度重なる侵攻に追われ、百済に屯たむろする新羅軍は窮地に陥りつつあった。

年が明け、高句麗の侵攻を撃退した新羅は、百済の南に軍を差し向けた。

三月、大和は、阿部比羅夫らを大将軍とし、三万の水軍を百済に向け出発させた。  
それから半年の間、百済各地で小競り合いが続いた。

八月、ついに唐が動いた。百七十艘の水軍が、錦江を渡って周留城に向かった。

八月二十八日、大和と唐の水軍は、錦江の河口に近い白村江<sup>はくすきのえ</sup>で激突した。